【ポスター発表】

滞日ブラジル人のメンタルヘルス問題に関する一考察　その（2）

－ブラジル人のメンタルヘルスに対する意識－

○　関西福祉科学大学　　寳田　玲子（8589）

木村　志保（関西福祉科学大学・5949）　柿木　志津江（関西福祉科学大学・4238）

キーワード３つ：メンタルヘルス、ブラジル、スティグマ

１．研 究 目 的

2014 年 12 月末時点の法務省の統計による日本の外国人登録者数（法務省　2014）は、212 万人を超えた。212 万人のうち、ブラジル国籍の登録者数は約 17.5 万人となっており、アジア諸国をはじめとする中国や韓国・北朝鮮などの人数には及ばないものの、依然多くのブラジル国籍の人びとが日本で暮らす。ブラジル国籍の多くは、日系ブラジル人であり、1990 年の入管法改正によるビザの緩和で、日本での在留資格を取得し、「デカセギ」労働者として来日した人たちである。かれらの中には、2008 年に起こったリーマンショック以降も本国に戻らず日本に定住している人びとも存在する。日系ブラジル人の滞在の長期化は、もはや労働問題や就労問題といった特化した問題にとどまらず、かれらが今後日本で生活し、さまざまな福祉サービス、制度を利用することが確実となってくる（寳田、柿木、木村　2015）。特に将来の見通しが立たない不安定な生活基盤は、心身への支障をきたし、ストレスが生じたり精神疾患を患うことにもつながる。

しかしながら、滞日ブラジル人のメンタルヘルスに関する調査は昨今始まったばかりであり、実態が明らかにされていないことが多く、先行研究なども大変少ないのが現状である。そこで、今後メンタルヘルス及び精神保健福祉サービスに関する調査を行う前に、本国ブラジルでのメンタルヘルスのシステム及びブラジル人の精神障がいに対する考え方を整理し、ここから改めて滞日ブラジル人のメンタルヘルス問題に対するアクセシビリティを考察することとした。

２．研究の視点および方法

本研究では、文献研究及び WHO が行っている各国の調査報告をもとに、ブラジルにおけるメンタルヘルスのシステムについて整理することとした。そしてさらに、精神疾患、精神障がいに対するスティグマに注目し、クロス・カルチュラルな視点からブラジル人のメンタルヘルスに対する意識を考察することとした。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に沿って、先行研究による他説と自説を峻別した。また、資料の出典、引用文献の表記を適正に明示し、用語等の使用に際しての記述においても留意した。

４．研 究 結 果

WHOが2007年に発表した報告書によると、2006年のブラジルの保健医療の支出全体に

占めるメンタルヘルスの支出割合は、2.35％で、そのうち、精神科病院への支出割合は49％、そのほかの精神保健医療サービスが51％となっている。2001年の精神科病院への支出割合が80％近くあったことから、メンタルヘルス問題に関して精神科病院への入院以外の選択肢が広がってきたことがうかがえる。また、外来の精神科医療機関にはCAPS(Centros de Atenção Psicosocial)と呼ばれる「心理社会コミュニティセンター」があり、そこでは夜間も含めた治療が行われている。CAPSには児童専用（66ヶ所）、アルコールなどの依存症専門のセンターも設けられおり、センター全体で人口10万に対し1,951人が利用しているとされている。地域の精神科医療機関は476ヶ所、2,480人が利用する一方、精神科病院は、公立及び私費による医療サービス含めた医療機関合わせて228ヶ所、病床数は50,045床（5年間で27％削減された）となっている。ブラジルでは、今後地域を中心としたプライマリーケアの充実、サービス評価プログラムの促進が課題となっている（WHO　2007）。

先行研究からブラジル人のメンタルヘルスに対する意識をみると、二つの解釈があるとされている。心理療法などを中心とした心理社会的なこころの問題への診療と、精神疾患への診療である（Bastos-Turner 2006）。前者は障壁が少ないのに対して、後者はスティグマがあり、それにより必要な治療を受けることが困難となっている。これにはブラジル人の家族観がかかわっており、強い絆で結ばれているとされるブラジル人家族の中に精神疾患を抱える人がいると、家族の問題ととらえることが多い。しかし医療現場では、家族のケアよりも治療を中心に行うため、家族が罪の意識や責任などからスティグマを抱えることが多いとされている（Villares、Sartorius　2003）。その結果の一因として、一度精神疾患を抱えて入院した患者が家族の意向で再入院する確率が高いことがわかった（Loch 2012）。さらに、ブラジルの精神科医への統合失調症に対するイメージの調査においては、精神科医自らがスティグマを持っているといった調査結果が出ている(Loch他　2013)。

5. 考 察

以上の結果から、滞日ブラジル人のメンタルヘルス問題への取り組むべき課題として、ブラジル人の精神疾患、精神障がいに対する考え方、スティグマなどについても考慮すべきであることが考えられる。そして、かれらの持つ概念が、日本での精神保健医療のシステムを利用する際にどのような影響を与えるのか、診察までのプロセス、専門職者とのコミュニケーション、精神保健福祉サービスの利用状況等包括的なアプローチで検証していくことが必要である。さらに留意すべき点は、ブラジルサンパウロ市の自殺率に関する調査で、移民やアジア系（中国・韓国・日本）の自殺率が他のグループよりも高いという調査結果が発表されている（Bando 他　2012）。特に日系ブラジル人は、日本にルーツを持つ“日系文化”が混在することもあることから、今後、日本においても自殺予防に対する対策を講じていくことが重要であると考えられる。

※本報告は平成 27～29 年度日本学術振興会学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（課題番号 15K03997）「ニューカマーの障がい者のための生活支援システムの構築 - 滞日ブラジル人の調査から - 」（研究代表者：寳田玲子、研究分担者：木村志保、柿木志津江）の研究成果の一部である。